

フェデリコ・バデールとアンドレア・リッポマノに
おける「我らが時代」の認識—
統治階級の教育と『政治宝典』編集をめぐる一仮説
— (シモーネ・テスト)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系 公開日: 2026-03-26 キーワード: 作成者: 石黒 盛久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002004286

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



フェデリコ・バデルとアンドレア・リッポマノ における「我が時代」の認識

— 統治階級の教育と『政治宝典』編集をめぐる一仮説 —

シモーネ・テスタ [石黒 盛久 訳]

【訳者はしがき】

訳者が以下に翻訳を試みたのは、イタリアの政治思想史学者シモーネ・テスタ (Simone Testa) 氏が、『イタリア歴史叙述文学』(*Rivista di letteratura srotiografica italiana*) 誌第8号 (2024年) に掲載した論考「フェデリコ・バデルとアンドレア・リッポマノにおける「我が時代」の認識」の全訳である。極めて優れた思想史家として重要な仕事を公表しながら、我が国ではほとんど無名のこの研究者につき若干の紹介を行うことも必要であろう。

シモーネ・テスタ氏はエディンバラ大学にて修士号取得後、ロンドン大学ホロウェイ校においてイタリア文学分野の博士号を授与され、現在はフィレンツェ所在のアメリカの大学コンソーシアム International Studies Institute において、自身の研究に加え主にアメリカ人を対象とするイタリア文化・イタリア文学の教授に従事している。二つの単著 *Scipione di Castro e suo trattato politico*, Roma, Vecchiarelli, 2012 と *Italian Academies and Their Networks 1525-1700*, New York, Palgrave MacMillan, 2018 の他、ヴェネツィアを中心とした16世紀イタリアの政治的知識人のネットワークを主題に、多くの個別論文を公表したり研究プロジェクトに参加している。

氏の関心の焦点は15世紀後半から16世紀、フィレンツェの市民的人文主義を頂点に開花した政治文化(その代表がマキアヴェッリである)が、16世紀後半に生じた大航海時代の展開に伴う西欧世界の地理的拡大、活版印刷や学校教育の普及を踏まえた知の大衆化と共に如何に拡散変容したかを、とりわけ各地のアカデミーに参与した政治的知識人の活動の交差を通じ描き出す点にある。本稿においてもテスタ氏は、ヴェネツィアのアカデミア・ファーマの創設メンバーの一人フェデリコ・バテールの当該学会創設意図を、それを解明する重要史料と目されるアンドレア・リッポマノ宛書簡を素材に、この書簡を取り巻く背景の丁寧な掘り上げにより解き明かそうとしている。

こうした解明により浮かび上がるのは、バテールの代表的政治論考『政治宝鑑』(Tesoro Politico)に窺える如き、歴史的知識や地理的知識のデータベース化に基づく、統治に資する政治知の技術化という16世紀後半の傾向に他ならない。この傾向こそが16世紀後半の政治論における、「国家理性論」をもたらしていくものとなる。

《翻訳》

ヴェネツィアの統治階級の教育の場たらんとすの意図のもと創設されたアカデミア・ヴェネツィアーナ、通称アカデミア・デッラ・ファーマは、世界の諸国の民族の制度と慣習そして風俗をめぐる研究と討論につき格別の任務を有していた。政治的性格の議論は、フェデリコ・バテールの既にアカデミアの創設以前からの主要な関心の一つ¹、即ちその『委任証書』(Istrumento di deputazione)において彼が政治的評議会に付託した中心的役割の内に確認し得る関心から湧出している²。アカデミアの歴史の復元のためポール・ローレンス・ローズにより校訂された史料の内に、バテールがアンドレア・リッポマノに書き送った一通の書簡がある。それは今日に至るまで、アカデミア・ヴェネツィアーナを研究する者たちにとり大変示唆的な書簡となっている。本論においては活動生活、政治と地理、政治家にとっての俗語と歴史の活用といった、その相互間において絡み合ういくつかの主題を取り上げることについて、このアカデミアの有した傾向を強調すべく、ローズにより示された解釈とは異なる解釈を踏まえ、この書簡の内容を掘り下げることが図られる。

書簡とそれにまつわる登場人物

フェデリコ・バテールは到着しなかったアンドレア・リッポマノの親書(そこ

¹ A. Stella, *Badoer, Federico*, in *Dizionario biografico degli italiani*, V, Roma, istituto della Enciclopedia italiana, 1963, pp.106-108.

² [Istrumento di deputatione]. 1560. 30 dicembre. In Venezia in contrada San Cantian nella casa dell' habitazione del clarissimo M. Federigo Badoer. John Rylands Library, Aldine Collection 20989 (<https://edit16.iccu.sbn.it/resultset-titoli/-/titoli/detail/CNCE76>).

において後者は前者に、ローマ聖座での立身のための知的準備につき助言を求めている)に対し、その返信として、この若き友人にして同朋市民たる彼へ手紙を書いた。このような要件を踏まえジローラモの兄弟アンドレア・リッポマノ(1531-1607)を、この書簡の受取人と想定することが可能とされたのである³。バデルの仲介を通じ、オデルツォ出身の新ラテン派詩人たる文人ジョバンニ・バティスタ・アマルテオは、リッポマノ家の家庭教師の職を手に入れたが⁴、正に彼により収集された書簡群(この収集は恐らく、実現されなかったその刊行版のために為されたものだったのであろう)のお蔭で、今回その全貌を付録として報告し、更に注解を加えようとしている書簡が今日に伝来されたのであった。カトリック教会での閱歴を始めるにあたり未だ年若なアンドレア・リッポマノは、アゾーラの大司祭の称号を獲得するに加えて、サン・ジェルバシオ・エ・プロタシオ大修道院の受給院長及びダルマツィアのおセロの修道院長に就任した。リッポマノは同時にマルタ騎士団にも入会している。しかし彼の司牧には欠ける点が極めて多かったため、アゾーラ司教区における巡察の結果、リッポマノは大司祭職を辞することを余儀なくされてしまった。彼の母国との関係は1566年7月に彼が聖座のため、なかんずく聖座の駐ヴェネツィア大使ジョバンニ・アントニオ・ファッキネッティのために、スパイ行為を行ったという告発に基づき逮捕され⁵、その結果1567年12月23日流刑に処されたことにより悪化した⁶。

日付が欠けているものの当時皇帝宮廷の在所であったアウグスタから発信されたバデルの親書は、バチカンの教皇図書館のレジネンセ・ラティーノ手稿

³ 以下を参照。G. Gullino, *Lippomano Girolamo II in Dizionario biografico degli italiani*, LXV, Roma, istituto della Enciclopedia italiana, 2005, pp.238-43; A. Lui, *Gli ultimi anni di Vincenzo Duranti. Il ministero asolano del vescovo di Tremoli*, in «Brixia sacra. Memorie storiche della diocesi di Brescia», I-11, 2011, pp.189-212 (とりわけ pp. 193-95) e P. Preto, *I servizi segreti di Venezia*, Piacenza, EST, 1999, p.115 (prima edizione Milano, Il Saggiatore, 1994) .

⁴ A. Buiatti, *Amalteo, Giovanni Battista*, in *Dizionario biografico degli italiani*, II, Roma, istituto della Enciclopedia italiana, 1960, pp.629-31.

⁵ Preto, *I servizi segreti di Venezia*, cit., p.115.

⁶ Lui, *Gli ultimi anni di Vincenzo Duranti*, cit., p.193.

(Reginense latino)2027に所在している⁷。手稿は二部に分かれており、前半(cc. 1r-9v)はアマルテオだけではなく、その他の受取人宛の手紙も含まれているが、更に今回精査する手紙のように、〈第三者〉間で交わされた手紙もいくつか含まれている。アマルテオ書簡集の〈第一巻〉(cc.12r-89v)がそれに続くが、それは「ジヨバンニ・バティスタ・アマルテオ氏の書簡集第一巻目次」によって締めくくられている。その送信先はアンドレア、ジヨバンニそしてジェロニモのリッポマノ兄弟、ドメニコ・ベニエ、フェデリコ・バデル、ウルバノ・モルロッピーノ、ジェロニモ・フラカストロ、イアソン・デ・ノレス、パオロ・マヌツィオ、クラウデオ・トロメイその他に及んでいる⁸。アマルテオがアカデミア・デッラ・ファーマの会員の一人ではなかった(なぜなら彼は既に1558年にラグーザ共和国の秘書官としてダルマツィアに派遣されており、そこにおいてアカデミア・ディ・コンコルディを創設していたからである)にせよ、アカデミア・ベニエの常連の一人ではあったことを考えれば、これらの知人たちが、バデルのそれと重なり合っていることに驚く必要は無かろう。アカデミア・デッラ・ファーマが、まさにラグーザ共和国について出版しようと取り組んだという関係自体が⁹、アマルテオとバデルそしてかつての友人たちとの関係の継続性の証であるかのように観じられる。

ローズが今回取り上げる手紙を転記した際、彼はその執筆年を1549年と示唆したが、それはアカデミア・ヴェネツィアーナ創設のほぼ10年前ということになる。だが既にフェデリコ・バデルは1539年には、Savi agli Ordini(海事監督委員会)の一員としてヴェネツィア共和国に仕える経歴を開始していた。従って「私が我らが共和国に仕え始めてから14年になる」との彼の断言は、1553年になされた

⁷ この史料はパチカン図書館によりオンライン公開されている。これは同じくパチカン図書館蔵史料 Ms. Vat. Lat. 9065, cc. 68r-69r の複写である。

⁸ La Berra, *Un umanista del Cinquecento al servizio degli uomini della Controriforma. Giovambattista Amalteo friulano (1525-1573)*, in *L' Arcadia*, I, 1917, pp.19-48; *ibidem*, II, 1917, pp.47-86; *ibidem*, III, 1918, pp.117-34.

⁹ *Somma delle opere che in tutte le scienze et arti più nobili, et in varie lingue ha da mandare in luce l'Academia Veneziana, Parte nuove et non più stampate, parte con fedelissime tradottioni giudicose corretioni, et utilissime annotationi reformate*, Venezia, Nell' Academia veneziana, 1558 (頁数記載なし) 所載の *Politica* の項を参照。

ことになる¹⁰。その年に彼はAvogador di Comun(都市弁護人)の地位にあった。だが1554年の11月には皇帝カール5世の下でのその使命のため、彼はアウグスタの街に実際に乗り込んできている。従ってこの「14年」はざっくりとしたものと取るべきで、そこでこの書簡が1554年に書かれたものと考えerことは十分可能であるし、それどころか1555年の10月からドイツにおける使命が完了した1556年の1月の間であってもよい。スペインのフェリペ2世宮廷における滞在期間の後、バデールは1557年祖国に立ち戻り、それから数か月してその地にアカデミア・ヴェネツィアーナを創設したのだ。手紙の執筆時期とアカデミアの開設時期の年代上の接近は、この書簡とアカデミアが企てたいくつかの出版計画との間の、数多の符合を説明してくれるものである。

政治的主題

政治に関して言えばニッコロ・マキアヴェッリの作品を、ここで想起するのが適切であろう。この人物こそは他のごく少数の人々と並んで、文人にして秘書官、そして外交官の姿を具現した人物であり、その「政治外交上の」観察や経験は『戦争の技法』を通じ1521年以降、公になり始めていた。マキアヴェッリ[著作]のヴェネツィアへの降臨とその「爆発的な」流通は、良く知られる処である¹¹。『君主論』やヴァレンティーノ公の下での、或いはフランスやドイツにおける使節行におけるフィレンツェ政府秘書官の経験がここに呈示されている。時局に応じた政治諸論考が¹²少なくとも1537年以降出回っていた一方、1532年に刊行されたか

¹⁰ Biblioteca Apostolica Vaticana, Ms. Reg. lat. 2027, c. 2v.

¹¹ この点に関してはA.E. Quaglio, *Indicazioni sulla fortuna editoriale di Machiavelli nel Veneto*, in《Lettere italiane》, XXI, 1969, 21. Fasc. 4, pp.399-424 (特に pp.414-18); G. Procacci, *Machiavelli nella cultura europea dell'età moderna*, Bari, Laterza, 1995, pp. 11-21; F. Bausi, *Il Principe dallo scrittorio alla stampa*, Pisa, Edizioni della Normale, 2015, pp. 121-25; G. Letterati, *Machiavelli in gioco. Un agente Segreto papale a Venezia (1525)*, in《Studi e materiali di storia delle religioni》, LXXXIV, 2018, fasc. 2. pp. 688-729.

¹² ドイツからの報告書に関してはC. Vivanti, *Machiavelli e l'informazione diplomatica nel primo Cinquecento*, in *La lingua e le lingue di Machiavelli*, a c. di A. Pontremoli, Firenze, Olschki, 2001, pp. 21-46を参照のこと。

の『デイスコルスィ』をはじめ、彼の手になる諸作品は何度も再刊されている。通常は政治的小品と結び付けて取り扱われる『カストルッチョ・カストラカーニ伝』は、『君主論』に先立ち軍事指揮官や政治家の行動規範のいくつかを明らかにするべく、幾度も参照されるべき範例的歴史書と目された¹³。ヴェネツィアにおいてマキアヴェッリの諸作品を刊行した出版者たちの中でも、老アルド・マヌツィオの継承者たちが際立っている。1540年には彼らの印刷機から、『デイスコルスィ』やその他の小品を伴った『君主論』、そして『戦争の技法』と『フィレンツェ史』が、全4巻本として一挙に刊行されている。同様の企画は1546年にも再度試みられた。また『君主論』は1540年にも刊行されているが、[そこに記載された]書誌情報からアルドの継承者たちが、同じ年に『デイスコルスィ』と『戦争の技法』更には『フィレンツェ史』までも再版していることがわかる。つまりアルドの継承者たちが、その作品の印刷をバオロ・マヌツィオが請け負っていた、アカデミア・デッラ・ファーマにもたらしたのである¹⁴。しばらく後の世紀中盤に入ると、マキアヴェッリの著述は[出版検閲のために]直接閲覧できなくなってしまったが、既にアカデミア・デッラ・インフィアマーティの若き熱狂的な見参者として知られ、後には[アカデミア・デッラ・]ファーマの会員となったフランチェスコ・サンソヴィーノにより縦横無尽に活用されることとなるだろう¹⁵。そればかりではない。サンソヴィーノはマキアヴェッリのフランスとドイツに関する報告書を、自身の『古今の王国ならびに共和国の統治について』(ヴェネツィア 1561年)において公刊している。

つまりアカデミア・ヴェネツィアーナの創設期における、マキアヴェッリ著作の出版市場への出現は顕著なものがあつた。そこにおいて、ヴェネツィアの国制に対する特別な関心を伴った「国事」に関する議論がごく普通に為されていた。《オ

¹³ A. Montevocchi, *Vita di Castruccio Castracani*, in *Machiavelli. Enciclopedia machiavelliana*, a c. di G. Inglese- G. Sasso. 3 voll., Roma, Istituto dell' enciclopedia italiana, 2014, II, pp.687-94 参照。

¹⁴ 〈老アルド・マヌツィオの後継人たち〉との刻印を伴った刊行事業へその参与については、T. Sterza, *Manuzio, Paolo*, in *Dizionario biografico degli italiani*, LXIX, Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana, 2007, pp.250-54 を見よ。

¹⁵ V Lepri, *Layered Wisdom. Early Modern Collection of Political Precepts*, Padova, CLEUP, 2015 参照。

リチェッラーリの園」という環境下における、彼の政治的見解や俗語に関する見解の共有の経験のゆえに、まさにこの園から論を起こすのが適当であろう¹⁶。それはフランチェスコ・グイッチャルディーニが性格付けするところの、「半ばアカデミアのようなもの」であったし¹⁷、すぐ後に検討するように、アカデミア・ヴェネツィアーナが競い合おうとした当のものでもあった。[ヴェネツィアの]多くの文人が、マキアヴェッリとオリチェッラーリの園の経験のヴェネツィアにおける評価についての、多かれ少なかれ直接的な媒介者たり得た。中でもヴィンチェンツォ・ケリーニ (1478-1514) やガスパーロ・コンタリーニ (1483-1542) といった地域の文人たちや¹⁸、より間近な存在としてはベネデット・ヴァルキ、そしてもちろん論争好きのフィレンツェ人アントニオ・ブルチョリがこうした媒介者の役を担っていた¹⁹。ヴァルキはそれらの会合をその『教授録』(Lezioni)に書き留めたし、ブルチョリもまたそれを1526年に刊行された自身の著『道徳哲学についての諸対話』に再録している。たとえもしこの1526年の時期にブルチョリが知っていたのが『戦争の技法』と『君主論』だけだったとしても²⁰、自身の『対話』の第二版(1537-38)において彼は対話者の顔ぶれを変え、そこにマキアヴェッリの名を付け加えるのみならず、『ディスコルスィ』に関する広範な言及を行っている²¹。いっぽう『人間的自然哲学をめぐる諸対話』の1544年版に関して言えば、そこに納めら

¹⁶ この点については F. Gilbert, *Machiavelli e il suo tempo*, trad. it. A. De Caprariis, Bologna, il Mulino, 1977 (prima edizione Bologna, il Mulino, 1964), pp.40-41 及び R.M. Comanducci, *Orti Oricellari*, in *Machiavelli. Enciclopedia machiavelliana*, cit., II, pp.261-265 参照。

¹⁷ F. Guicciardini, *Oratio accusatoria*, in ID., *Opere*, ac. Di E. Lugnani Scarano, 3 voll., Torino, UTET, 1970, I, p.553。その記述によれば「彼はその庭園をある種のアカデミーとして開放した。そこには多くの博識者たちや若き学芸の愛好者たちが参会し、学問その他の価値ある事どもが語り合われた」。

¹⁸ Procacci, *Machiavelli*, cit., p.13 参照。

¹⁹ R.N. Lera- C. Varotti, *Brucioli, Antonio* in *Machiavelli. Enciclopedia machiavelliana*, cit., I, pp.218-21 を見よ。

²⁰ A. Brucioli, *Dialogi*, Venezia, Gregorio de Gregori, 1526 e Bausi, *Il Principe dallo scrittore*, cit., pp. 121-25 参照。

²¹ *Idibdem*, p.125。またその政治論の執筆に際しブルチョリにより用いられた〈方法〉をめぐることは G. Allen, *Aristotle's Politics in the Dialogi della morale philosophia of Antonio Brucioli*, in *Vernacular Aristotelism from the Fourteenth to the Seventeenth Century*, ed. by L. Bianchi, S. Gilson, J. Krayer, London, University of London Press, 2016, pp. 109-22 を見よ。

れた「天賦的知性をめぐる第11対話」の対話者はドメニコ・ベニエとフェデリコ・バデールである²²。その二年前に同じブルジョアがアリストテレスの『政治学』を俗語に訳していた傍ら²³、『政治学』の俗語訳の一つのバージョンが、アカデミア・ヴェネツィアーナの出版計画の中に登場している。即ち、『往古の事例に加え昨今の事例をも伴った、そこにおいてあらゆる種類の統治体が疑う余地なく見出されるところの、要約へとまとめられたアリストテレスの政治に関する八巻よりなる論考』の事である。同様に重要なのはそれに続く、『そこにおいてその正しさの大半が古今の諸々の都市の実例により検証されたところの、アリストテレス『政治学』についての解釈』という題名に他ならない²⁴。

俗語

バデールの俗語に対する関心は、パドヴァのアカデミア・インフィアマーティ[に触れること]無しには、説明し難いものとなろう²⁵。中でもこの学会には、ダニ

²² A Brucioli, *Dialoghi della naturale philosophia*, Venezia, Francesco Brucioli e fratelli, 1544, pp. 36r (Bolzoni, *La stanza della memoria*, cit., pp.4-5 に引用あり)。

²³ *Gli otto libri della republica, che chiamono Politica. Nuovamente tradotti di greco in vulgare italiano. Per Antonio Brucioli*, Venezia, Brucioli et i frategli, 1542. だが実際にはこのテキストは(ギリシア語からではなく)ラテン語から翻訳されている。この点については、E. Del Soldato, Brucioli, Antonio, in *Encyclopedia of Renaissance Philosophy*, ed. by M. Sgarbi, Dordrecht, Springer, 2022 参照。

²⁴ *Somma delle opere*, cit., c. M1v.

²⁵ インフィアマーティ学会については R. Samuels, *Benedetto Varchi, the Accademia degli Infiammati, and the Origin of the Italian Academie movement*, in *Renaissance Quarterly*, XXIX, 1976, fasc. 4, pp.599-634; M.T. Girardi, *Accademia degli Infiammati*, in *Encyclopedia of Renaissance Philosophy*, cit.; F.Tomasini, Piccolomini, Alessandro, in *Dizionario biografico degli italiani*, LXXXIII, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 2015, pp.203-08; M.T. Girardi, *Accademia degli Infiammati e dintorni*, in *Letteratura e scienze, Atti delle sessioni parallele speciali del XXIII Congress dell'ADI*, a c. di A. Casadei, F. Fedi, A. Nacinovich, A. Torre, Pisa 12-14 settembre 2019, Roma, Adi, 2021. ダニエーレ・バルバーロ (daniele Barbaro) については M.T. Girardi- L. Signori, *Daniele Barbaro letterato e il Della eloquenza* in *Aevum*, LXXI, 1997, fasc. 3, pp.651-89 及び M. Sgarbi, *L'Etica di Aristotele presso l'Accademia degli Infiammati*, in *Éthikè Théoria. Studi sull'Etica Nicomachea in onore di Carlo Natali*, a c. di F. Masi, S. Maso, C. Viano, Roma, Edizioni di Storia e letteratura, 2019, pp. 403-27.

エーレ・バルパロ、アレッサンドロ・ピッコロミーニ、スペローニ、若きサンソヴィーノそしてヴァルキラといった多士済々が顔を揃えていたし、彼らのバデールとの交渉は周知のこととなっている²⁶。インフィアマーティ学会員たちは彼らの会合を停止してしまっただが、それというのもアリストテレスを俗語で接し易いものにするという意図が、[彼らの間で]次第に乏しくなって行ってしまったからである²⁷。まさにこのことこそが、アカデミア・ヴェネツィアーナにより専ら俗語を用いた指導階級の教育に対し宛てられた強調というものを、説明可能なものとしてくれる²⁸。

往復書簡のうちのいくつかが、バデールのリッポマノ宛書簡の理解のために重要な見解の交換を明らかにしている。1542年にパウロ・マヌツィオにより編纂された書簡集は²⁹、バデールとその親友ドメニコ・ベニエに宛てられた、編纂者の献辞により始まっている³⁰。一出版業者によるヴェネツィア貴族階級の二人の士に向けられた恭謙さというに加えて、俗語の使用を普及させたいとの思いを、ここに読み取ることができる。「小生は賢人がイタリア俗語により流麗に書き綴った手紙を収集し、それを刊行したいものと念じておりました。貴殿らお二方はそのような企てを、意図と判断の両面において開花の士が考究し丹精するに相応しいことであると、常日頃から評してこられました」³¹。マヌツィオが言うには、こうし

²⁶ Bolzoni, *La stanza della memoria*, cit., pp.3-5 を参照。

²⁷ R. Samuels, *Benedetto Varchi*, cit., p.623.

²⁸ V. Guarna, *L'accademia veneziana*, cit., p.86.

²⁹ インフィアマーティ学会員たちとの関係に関しては L. Braidia, *Libri di lettere. Le raccolte epistolari del Cinquecento tra inquietudini religiose e buon volgare*, Bari, Laterza, 2009, pp.46-47.

³⁰ G. Comiati, *Venier, Domenico*, in *Dizionario biografico degli italiani*, XCVIII, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 2020, pp.548-51. Accademia なる語の定義については、P. アレティーノの一文が名高い (P. Aretino, *Lettere*, a c. di P. Procaccioli, Tomo IV, Libro IV, Edizione nazionale delle opere, Roma, Salerno editrice, pp.390-91)。「善良なるベニエ・ドメニコのアカデミアが行う証言によれば、彼を追い詰める宿命にもかかわらず、彼はその榮譽ある部屋を単なる学舎ではなく神殿としたのであった」。この文脈からもこの言葉 (accademia) の使用が、制度化された機関を意味するものではないことは明白である。

³¹ P. Manuzio, *Alli magnifico, et molto valorosi, M. Federico Badoaro et M. Dominico Veniero, Paolo Manutio*, in *Lettere volgari di diversi nobilissimi huomini et eccellentissimi ingegni scritte in diverse materie. Libro primo*, Venezia, In casa de' figliuoli di Aldo, 1542 (この書には頁数記載が無いが c. 2r である)；

た集成の活用はその理由を、著者のより内面の思索は、俗語を通じてこそ解し易いものとなろうという点に求められる。それゆえマヌツィオの企画はまた、インフィアマーティ学会員たちの間で喧しく論じられたスペローニの理論にその端緒を有することとなる。その理論とは即ち、俗語はラテン語に劣らぬ価値を有しており、公德心が涵養されるようその活用を奨励することや、当代におけるその研究の促進が肝要だということである³²。

同じ集成においてダニエレ・バルバロは、恐らくはインフィアマーティ学会の会合の一つにおいて繰り広げられた議論を受け継ぎつつ、俗語と雄弁をめぐる諸問題に疑いの余地なく関心を向ける若干二十歳のバデールに書簡を寄せている。「私は、私がそれを以て生を享けた言葉と異なる言葉により、物を書くことも無ければ思索を行うことも無い」³³。[バルバロの]手紙のこれに続く部分は、実体験より雄弁を過剰に重んじる気風に対する批判に捧げられている。「我らが父祖は共和国を創設するにあたり、言葉にこれほどまでの配慮を払うことなく、いとも容易に物事を説得することを思案した。そうした考えは実経験と物事の慣習に由来している」³⁴。

日付が入れられていないものの1542年ごろに作成されたルドヴィコ・ドルチェの手紙は³⁵、威名赫々たるM・フェデリコ様、あなた様のお手になる二通の手紙—その一つのラテン語によるもの、そしてまた一つは俗語によるもので、まず前便

³² S. Speroni, *Dialogo delle lingue*, in *I dialogi di Messer Sperone Speroni*, Venezia, Eredi di Aldo Manuzio il Vecchio, 1542, pp. 105v-31v ないしは Daniele Barbaro による校訂版。彼の計画の総体については、L. Piantoni, *Speroni, Sperone*, in *Dizionario biografico degli italiani*, XCIII, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 2018, pp.581-86 及び Sgarbi, *L'Etica di Aristotele*, cit., pp. 407-11 参照。

³³ D. Barbaro, *Lettera a Federico Badoer*, in *Lettere volgari*, cit., p. 25; Bradia, *Libri di lettere*, cit., p.57; C. A. Girotto, *Les éditeurs de danièle Barbaro*, in *Danièle Barbaro 1514-1570. Vénétien, particien, humaniste*, ed. par. F. Lemerle, V. Zara, P. Caye, L. Moretti, Turnhout, Brepols, 2017, p.410.

³⁴ Barbaro, *Lettera*, cit., p. 26.

³⁵ L. Dolce, *Lettere*, a cura di P. Procaccioli, Manziana, Vecchiarelli, 2015, p. 138.

が博学多才なエニャツィオに³⁶、また後便はその数日後に我らが善良にして美德溢れるマルミッタに宛てられたものであるわけですが－を拝読するに際して……』という、バデール自身の手紙の二人の宛先人に対する、極めて興味深い言及から始まっている³⁷。手紙の内容は文体やバデールによる〈着想〉、即ち論題そして構成や言葉の選択、隠喩の使い方に焦点が当てられている。それらすべての側面はドールチェによれば、[バデールが]依然「柔弱未熟な年頃である」にもかかわらず、適切でまた効果的なものと判断された³⁸。こうした文脈において我々に強い印象を与えるのは、良く均衡のとれた人体の如き、バデールによる文体に対する隠喩的示唆に他ならない。続いては構成である。「それにより貴殿らの諸概念に形態が与えられ続けている時、それらの一つ一つは異なった方向に歩んでいながら、全てが結局は等しく交錯し合うことになる。そしてその全てが適切な均衡を示す結果、その足は頭と照応し合い、頭は四肢と照応し合う」³⁹。既にリナ・ボルツォーニにより指摘されたように、人体論的構造はアカデミア・デッラ・ファーマ創設に関する重要でかつまた独創的な要因となろう⁴⁰。

既に1537年、ピエロ・アレティーノが前途洋々たるバデールを賞賛すると共に、

³⁶ 彼に関しては E. Mioni, *Cipelli, Giovanni Battista*, in *Dizionario biografico degli italiani*, XXV, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 1981, pp.698-702 を見よ。イグナツィオとはチベッリの、アルディーナ学会 (Accademia Aldina) の最初の参加者たちの間における綽名である。彼はパオロ・マヌツィオと緊密な関係を持ち、1520年以來、公国書記官局管轄のサン・マルコ学校において、〈人文主義者の巨匠〉に指名されていた。

³⁷ P. Consentino, *Marmitta, Giacomo*, in *Dizionario biografico degli italiani*, LXX, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 2008, pp.625-627.

1540年3月7日付のマルミッタ発ドールチェ宛書簡は、その挨拶の部分においてバデールやベニエそして〈我々の学会〉について言及しているが、この〈我々の学会〉とは即ち、プロカッチョーリが主張する如く、多少とも洗練された会話をなすべくベニエの家に集まった友人たちの集団の定義を意図した定型句に他ならない (Dolce, *Lettere*, cit., p. 200 参照)。

³⁸ *Ibidem*, 89v.

³⁹ *Lettere volgari*, cit., c. 89r.

⁴⁰ [*Instrumento di deputatione*] . 1560. 30 dicembre, c. 1v; Bolzoni, *Stanza della memoria*, cit., pp. 10-12 並びに P. Procaccioli, *Un pregiudizio lungo due secoli. Per una rilettura delle accademie d'antico regime*, in *L'Italianistica oggi: ricerca e didattica. Atti del XIX Congresso dell'ADI*, a c, di B. Alfonzetti, T. Cancro, V. Di lasio, E. Pietrobon, Roma, Adi, 2017.

後者は次第に外交官としてのキャリアをたどり始めていた⁴¹。これまた常にアレティーノの記述から知られることだが、ウルビーノにおける外交使命（1547）の間、バデールはジョバンニ・バッティスタ・アマルテオやスペローネ・スペローニ、パオロ・マヌツィオそしてフランチェスコ・アンジェロ・コッチョといった文人たちによって取り巻かれていた。更には俗語の著名な擁護者クラウディオ・トロメイと⁴²、俗語擁護運動の父ピエトロ・ベンボもまた、彼らの書簡中にバデールについて触れ、彼を賞賛している⁴³。

内容の点から見てもバデールのリッポマノ宛書簡は、ラテン語を含む古典語に対する俗語への偏愛と、観想生活に対する活動生活の価値の礼賛の双方をもたらす文化史の、堅固な参照点となっている⁴⁴。この手紙は国政の要にある人物[バデール]により、そのようなものたらんとしている人物[リッポマノ]に宛てられたもので、教皇に仕えることに身を投じようとする人に対し、ほとんど役に立たない事柄から遠ざかるようにとの、リッポマノに対する親愛感溢れる勧告は無論のこと、それ以上にその簡潔明瞭な文体により際立っている。バデールは国事をめぐる議論に対するマキアヴェッリの遺産や、俗語の活用といった事柄を収集したが、その一方で[マキアヴェッリが活用したような]古代の歴史の間答無用の有用性を、時というものが変化するものだという理由から否定している。リッポマノの質問に回答するかたちでバデールは、目下の議論の場において誤解の生じる余地を取り除き、実践を理論的理解の上に置いている。

⁴¹ P. Aretino, *Lettere*, a. c. di P. Procaccioli, Roma, Salerno, editrice, 1998.

⁴² C. Zwielerin, *Un discorso politico sconosciuto di Claudio Tolomei del 1536: machiavellismo metodico all'inizio della terza guerra Habsburg-Valois*, in 《Il pensiero politico》, XLIV, 2011, fasc. 3, pp. 369-76の論によれば、トロメイは *Discorso intorno alle cose della guerra*, Venezia, Accademia veneziana, 1558の著者に他ならない。

⁴³ P. Bembo, *Lettere*, a c. di E. Travi, 4 vol., Bologna, Commissione per i testi di lingua, 1987, III, p. 522参照。この個所で編者がフェデリコ・バデールを占星術師と誤って解している点に注意が必要である。

⁴⁴ J. Kraye, *Moral Philosophy*, in *The Cambridge History of Renaissance Philosophy*, ed. by C. B. Schmitt, Q. Skinner, E. Kessler, J. Kraye, Cambridge, Cambridge University Press, 1988, pp. 303-68; Sgarbi, *L'Etica di Aristotele*, cit. 及び D. Lines, *Aristotle's Ethics in the Renaissance*, in *The Reception of Aristotle's Ethics*, ed. by J. Miller, Cambridge, Cambridge University Press, 2022, pp. 171-93.

大切なのは貴殿が如何なる職において活動しようと望んでおられるのか、神学者としてなのか、法曹家としてなのかはたまた政治家としてであるのか、よく吟味されたいということであります。もし貴殿の望みが最初の二つの職のうちのどれかであれば……それについて私が申しあげられることは、ごくわずかなことしかありません。しかし第三の職をお望みということであれば、前二者についてよりはるかに経験を有していることから……専ら[政治家という]私の職業に基づいて、そしてまたかかる研究をめぐって個人的に関わった長きにわたる研鑽のみならず、また同時に我らの共和国に仕え始めて以来14年という年月から獲得し得たかくのごとき経験に則して……なにがしかのことを申し上げることができましょう……貴殿はローマの内外においてさまざまのしかたで、教皇聖下の下での勤務のため、仕官なされることでありましょう。即ち、外に在っては諸君主の宮廷に駐節する教皇大使として、あるいはさまざまの都市に派遣される使節として、また内に在っては聖下が發布されます教書を始め、諸々の国事に関する検討官や執筆官としてあります。こうした案件の故に歴代の教皇は、当代のいろいろな要件に迫られて、ないしはご自身の判断に基づいて膝下の諸官吏を傾使される必要を、大いに有しておられるのであります。

「あらゆる善の根源としての道徳哲学に対する燃え上がるような欲求に」専心するようにとの、教皇庁に仕官し政治家としてのキャリアを重ねつつある若い友人に対する助言は、ヴェネツィアのインフィアマーティ学会の雰囲気を知るうえで意義深い⁴⁵。パデールとインフィアマーティ学会員たちの間の一またもつと遡ってオリチェッラーリの園との一知的な連関にあって、アリストテレスの『倫理学』や道徳哲学に関する議論がこうした文脈において、政治家の予備教養として如何に生き生きとしたものであったかを強調することが大切である。こうした議論は近世全般を通じて大学の領分にあっても、またより非公式な領域にあっても、政治

⁴⁵ Ms, reg, lat, 2027, c. 2r.

と倫理と経済を貫通する議論を意味していた⁴⁶。この先で検討することになるように、このことはアカデミア・デッラ・ファーマの世界における、出版に関して言っても、アカデミー会員間の討論に関して言っても、哲学のこのような側面に委ねられた重要性を明らかにしている。

このような文脈においてその上、バデールがそれによってラテン語やなかんずくギリシア語との対比において、俗語の選好を強調した、そのような定義づけが飛び出してくる。

…幾人かの外交官たちと必然的にラテン語で話すことが貴下にとり時によっては必要となるとしても、俗語を理解する最も荣誉ある宮廷の方々や、今日キリスト教世界のあらゆる宮廷で俗語を語る人々とみならず、ほとんどすべての君侯ともまた、それ[俗語]を用いて日常的に話すことが必要であるから、一般人を相手にする場合、それを論じるのが、私たちの俗語によってであろうとラテン語を用いてであろうと、私には貴下にとってどちらでもよいことではないかと判断する…。

ギリシア語に関してバデールは、サンソヴィーノからもあからさまに距離を置きつつ、断固たる態度をとった⁴⁷。

小生はギリシア語について言及することは控える。なぜなら小生は国政の要路に立つ者にとって、この言語の知識は不可欠な物ではないし、この言語についての研究に分類される作品もまた、必ずしも心得るべきものではないという見解を、ずっと抱き続けてきたからである。心得ておかなければなら

⁴⁶ 大学外の環境におけるアリストテレス『倫理学』に関する論争の方向性については、D. A. Lines, *Ethics, Renaissance*, in *Encyclopedia of Renaissance Philosophy*, cit. [オンラインにて公開 https://doi.org/10.1007/978-3-319-02848-4_193-1] 及び Sgarbi, *L'Etica di Aristotele*, cit., pp. 420-21 を見よ。

⁴⁷ 「その言語で執筆した碩学たちの故に私は、子供たちが諸言語（ラテン語とイタリア語）についてと同様に、ギリシア語について十分な教育を受けることをも望んでいる」(F. Sansovino, *Dell'auocato*, Venezia, Lelio Bariletto, 1566 (1aed. 1554), cit., p.8v) というサンソヴィーノの言葉と対比せよ。

ぬことは数多あり、私たちの生が死により断ち切られてしまう前に、その半分に目を通すことができれば精いっぱいなのである。

道徳哲学や俗語、教育的環境の変動そして「学究がその調査に留意しなければならぬ諸力の秩序」への誘いの強調は⁴⁸、[読者を]インフィアマーティ学会の懐における諸論争へと、そしてまたサンソヴィーノの注解書は無論のことながら⁴⁹、この学会におけるこうした諸論争から生み出された諸作品(その中にアレクサンドロ・ピッコロミーニの『高貴にまた自由な都市に生まれた人間の生活に関する知識について』(1542)やスペローネ・スペローニの『諸言語についての対話』(それは1542年に刊行され、アルド・マヌツィオの後継者たちによってたびたび再刊されている)が含まれる)や、ブルチヨリの啓蒙的な作品へと連れ戻すものであった。こうした作品への参照は若きバデールによる、このような会合への決して気まぐれではない参加を考えさせるものである。

こうした枠組みの中において彼は、政治的議論の領域における俗語[利用]の促進に、論争を契機としたヴェネツィア学会[インフィアマーティ学会]の創設や、この学会により企画された出版計画を通じて貢献したのである。学会の書記だったベルナルド・タツソは1559年に、諸国と諸民族の性格、そしてそれらの国において行われている多様な制度や法の相違をめぐる論争につき、書き記すこととなる。その時、彼はマルカントニオ・ダ・ムーラに「それがこの尊貴な共和国[ヴェネツィア共和国]の公達の誰にも顧みられないものであろうと、科学や芸術についてのみならず、その他の主題即ち国政や諸州諸国について、読書を続けていき

⁴⁸ B. Bonora, *Ricerche su Francesco Sansovino imprenditore e libraio*, Venezia, Istituto Veneto di Scienze Lettere e Arti, 1994, pp. 35-38 (36).

⁴⁹ 「それゆえ私は少年が、彼を良き人文主義者に即ちラテン語に堪能なる者にすべきあらゆる努力とあらゆる探究により、ものを読む力を早々に身につけるよう望みます。だがそれはたった一つの言葉の語源についてその頭脳を消耗させたり、たった一つの語句のために心を労したりするような銜学者となるためではありません」(Sansovino, *Dell'auvocato*, cit., p. 8r)。

ましよう。」と書き送っている⁵⁰。既に15歳となっていたトルクアートがこの会話について何事かを聞き及んでいたこと、そしてまたその対話篇『使節について』は無論のこと⁵¹、フランスの情勢に関する彼の報告もまた、[ヴェネツィアの]学会の催しにおける熱狂的な意見交換の環境の光の下、理解され得るものとなるということはあるようなことである⁵²。学会の内部におけるこうした実践に対する同様の評価はこれを、恐らくは1560年11月6日に、フェルトレの司教フィリッポ・マリア・カンペッジがヴェネツィア学会に書き送った手紙の中にも、見て取ることができる。そこにおいて彼はヴェネツィア学会を、次のようなことの故に高く評価したのであった。

あらゆる理論的及び実践的事柄を知ることが望まれ得るように、世界の時にこの、時にあの地域の諸原理が読み上げられるのが聞こえるということを通じ、貴下らと対話する人が時と共に、そこに人間的な幸福がかかっているような知識を持つようになる、ということが生じることになる⁵³。

⁵⁰ B. Tasso, *Delle lettere di Bernardo Tasso accresciute correte ed illustrate*, 2 voll., Padova, Giuseppe Comino, 1733, II, p. 459. 〈学会〉における国事に関する討論の観点から考察された、諸国について、そしてまた諸民族と諸地方についての経験の持つ有用性は、*Oratione seconda dell'istituzione dell'Accademie* [...] in *Orationi del Signor Fabio Patriti I, all'illustrissimo Signor Francesco Priuli Degnissimo Procurator di San marco. L'una delle quali tratta le lodi della Musica: et l'altra, dell'Istituzione dell'Accademie*, Venezia, Rampazetto, 1587 (頁の記載はないが凡そ3r-3v)。

⁵¹ R. Ruggiero, *Du platonisme à la diplomatie entre Castiglione et le Tasse*, in *Relations diplomatiques franco-italiennes dans l'Europe de la première modernité. Communication politique et circulation des savoirs*, ed. par G. Alonge-R. Ruggiero, Lecce, Pensa multimedia, pp. 271-92.

⁵² T. Tasso, *Tre scritti politici*, a. c. di L. Firpo, Torino, UET, 1980. 元来その執筆者を序盤フランチェスコ・ベランダに帰さねばならぬはずの、教皇使節のアンニバーレ・ディ・カプアに対する外交指令書が、誤ってタツソに帰された点が示唆的である。この点については S. Canzona, *Un'istruzione per Annibale di Capua: notizia intorno all'attribuzione a Torquato Tasso*, in 《Scaffale aperto. Rivista di italianistica》, XIII, 2022, pp. 61-87.

⁵³ [F. M. Campeggi], *Letera di Monsignor Reverendissimo di Feltre alla nobile et eccellentissima Academia Vinitiana* [頁数記載なし], John Rylands Library, Aldine Collection, 634.

近代史，地理学そして修辞学

古代史を犠牲に供した，近代史の有用性に対するバデールの強調は，オリチェッラーリの園の会合において育まれた人文主義的モデルの⁵⁴，反対の方向へと進んでいた。現代は単に経験の領域であるのみならず，通常古代史の研究に委ねられるが如き，政治行動の教訓の宝庫でもあった。

歴史の研究に格別の熱意を払うべきである……私はそれを，多くの人々が行うやり方とは正反対のやり方で行いたい。世の多くの人々はそれら[歴史]の著者を，まずはラテン語による歴史[ローマ史]から始め続いてギリシア語のそれ[ギリシア史]に遡り，それから現代のそれへと降りてくることにより，間違ったやり方で読んでいる。(私の考えによれば)私たちにとり多くの理由から疎遠なものに過ぎないその他の時代から始めることよりも，我々の時代から始めることの方が，貴下にとってもより大きな恩恵のあることとなる。だが一定の期間そのようなこと[現代史の研究]がなされたなら，そのあとでラテン人の歴史[ローマ史]，更にはギリシア人の歴史に及ぶというのが，私の最終的な目標である⁵⁵……それらの区々とした出来事の帰結をその

⁵⁴ Gilbert, *Scritti su Machiavelli*, cit., p.42はトッファーニンに倣って、「政治にとって歴史が重要であることと直感する点においてオリチェッラーリの園の知識人集団が、〈歴史学に基づく政治学〉即ち〈歴史的政治学〉の観念を、固有の性格として有する、これに続く政治思想の潮流と合致している」ことを認めている。

⁵⁵ Ms, reg, lat, 2027, c. 2r.

起因と共に併せて考察することによって⁵⁶、貴下はそれを、その卓越した知性によって取り扱うことがおできになる事でありましょう。

バデールの関心は現代の方にずっと傾けられている。だが「現代の出来事についての長きにわたる経験と、古代の出来事についての不断の読書を通じ感得された、偉大な人物の行動の理由」という『君主論』献辞における有名な一節を、無視してしまうことはできない⁵⁷。小ロレンツォ・デ・メディチに捧げられた献辞のよりいっそう文人的な文脈に比し、バデールの手紙の実践的文脈は、ヴェネツィアの大使の側の現代史に対する、疑いようのない偏愛の根拠たり得るものである。

このような思索の過程から、二つの考察が浮かび上がってくる。一つはフランチェスコ・グイッチャルディーニのそれにいっそう近いものとして浮かび上がる、バデールの感受性に関わる考察である。たとえそれを16世紀半ばの時点でヴェネツィアの大使が知る処ではなかったにせよ、グイッチャルディーニは畏友マキアヴェッリのローマ史に対する崇拜を批判した。第二の考察はリッポマノ宛書簡が、少なくとも政治的・歴史的そして地理学的主題に関して言えば、ヴェネツィア学会の宣言書として読まれ得るということを主張している。事実この書簡は、『全集』において歴史に捧げられた図書の一覧に確認できる古代の歴史家たちに対する、極めて批判的な観点を先取りしている。それらの考察は、歴史的方法に関するフランチェスコ・バトリーツィのより掘り下げられた、これに続く諸考察と

⁵⁶ 〈起因〉 *cagioni* という語句は、この後に報告される出版計画つまりは「出来事の“起因”を提示することにおいて」『完全なる歴史に関する三書』 *Tre libri della perfetta historia*、あるいは、『もっとも著名な古今の戦勝の起因』 *Le cagioni più segnalate vittorie antiche, et moderne* 及び『それ以外の諸民族とその勝敗との比較における、ローマ軍関し着目すべき一二の事項』 *Dodici più notabile notabili d'arme Romani con diverse nationi, con le cagioni delle vittorie, o delle perdite loro* なる題名を伴った徴兵軍設立計画において、繰り返し登場する言葉である。またこの〈起因〉 *cagioni* という語句は、たとえそれを読む折がバデールには無かったとはいえ、N. machiavelli, *Lettera a francesco Vettori (Firenze, 10 dicembre 1513)*, in Id., *Lettere a c.*, di F. Bausi, Roma, Salerno editrice. 2022, 3 voll., II, p. 1075 をも想起させるものである（「私は彼らと語り合うことに物怖じしませんし、また彼らの行動の理由 *ragioni* につき質問を発することを躊躇ったりも致しません」）。

⁵⁷ N. machiavelli, *Il Principe*, a c. di G. Inglese, Torino, Einaudi, 1995, p.4.

絡み合い得る諸考察に他ならない⁵⁸。

完璧な歴史に関する三巻。第一巻では二つの論題が取り扱われる。まず一つはローマ人の三人の第一級の歴史家たち、則ちカエサル、サルスティウスそしてリヴィウスについてである。いま一つの論題とは、他の三人の今度はギリシア人の優れた歴史家、則ちトゥキュジデス、クセノフォンそしてポリピオスをめぐるものである。第二巻においては、近代の歴史家間の優劣の比較が取り上げられる。そこでは彼らの内の誰一人として適切なやり方で、完全な歴史家としての資格を満たしていない。それどころか多くの点で一即ち事柄の適切なる選択という点において、出来事の原因を[適切に]提示しているかという点において、[叙述の]秩序正しさという点において、また語り口という点において、そして遂には[その記述の]真正性という点において一欠ける処があるということが、さまざまの理由を通じて説明されている。第三巻では、それがどこで生まれたか、どのようなそしてどれだけの部分にその完成が依存しているか、そしてまた如何なる経路を通じてそれが輝かしい結末へと導かれるかを示すことを通じ、歴史に対して適切な形態が付与されることとなる。

さらに先になると、古代の歴史家たちへの批判はより直接的なものになっていく。

⁵⁸ F. Guicciardini, *Ricordi*, a c. di R. Spongano, Firenze, Sansoni, 1951, C 110, p. 121における「何か話す毎にローマ人たちのことを持ち出すような奴らは、何と間違った考えを抱いていることだろう。[そうするためには]彼らの[都市ローマ]がそうであったように条件づけられた都市を有する必要があるし、また[ローマ人の]範例に従ってそれが統治される必要がある。それに相応しい資質を持たない者にとって、それは何と分不相応なことであろうか。それはあたかも驢馬が馬並みに走ることを期待するようなものだ」という記述を参照。

偽史について：これを通じて、それがギリシア人であろうとラテン[ローマ]人であろうと古代人たちが、多かれ少なかれ真実に欠ける処があったということは疑う余地がない。

バデールの外交的活動と皇帝宮廷におけるその直接的経験から考えても、出版についての後続するこの計画は、現代[の優越]への強調にとって極めて重要なものであった。

皇帝カール5世によりなされた全ての派兵についての一書。八巻に分かれ、そこには皇帝の決定や判断、策略と敵に対して施された技法や、その他の皇帝や隊長たちにより異なる時期に取り上げられた、他の多くの手段が記述されるのみならず、一方ないしは他方が挙兵するように促した原因が、多くの郷国や都市、民族そして彼らの風俗や起源と共に書き記される。

そのうえ現代という時代の分析のため、[ヴェネツィアの]学会は[以下のような文献を]刊行することを企てていた。

ジョーヴィオの著作の終点から起筆された、1543年から今日に至る歴史の書。

いま一つの事例は、ノーザンバーランド公ジョン・ダドリーの失脚の顛末に関わる一卷に由来する。

ノーザンバーランド公の一件をめぐるイングランド王国において生じた全騒動—そこから真正なる宗教と正当なる主君から逸脱した者が、いかなる惨めな末路をたどるか理解される⁵⁹。

⁵⁹ 言葉本来の意味での文学的剽窃の対象となった、この作品に関しては、G. Crosignani, *Raviglio Rosso, Giulio*, in *Dizionario biografico degli italiani*, LXXXVI, Roma, istituto della Enciclopedia italiana, 2016, pp.625-27 及び Gurna, *L' Accademia veneziana*, cit., pp. 202-03 参照。

常に直近の出来事の理解を当てとしつつ[ヴェネツィアの]学会は、教皇ユリウス3世とパルマ公国の間に1511年に生じた戦争についての一書を刊行しようと企てた。

より重大な宣言のための必要な通告を伴った、教皇ユリウス三世により都市パルマ、ミランドラに仕掛けられた戦争についての歴史⁶⁰

リッポマノ宛書簡に立ち返ればバデールは、当時その重要性を急速に増大させつつあったある技能すなわち世界誌—我々にとりその定義は依然不確かなものであり、そうであったようにその双子となる技能つまりは地理学と結び付けられていた—の学習を推奨しつつ⁶¹、《当世》への自身の関心の理由を明らかにした。現代に関わる政治要路の人物からの地理学の実践的活用に向けた関心が、ここにおいて要求される。それはそのための権威者が依然プトレマイオスであり続けている数学的アプローチに比べ、よりいっそう歴史に依拠するアプローチを想起させるものである。強調しなければならない他の基礎的な側面とは、修辞学の中心性に他ならない⁶²。そこでバデールはこう続ける。

こうした論議を通じ貴下は、政治家に世界誌[の知識を]教え込むことがな

⁶⁰ この戦争の原因と結果については、G. Brunelli, *Giulio III Papa*, in *Dizionario biografico degli italiani*, LVII, Roma, Istituto della Enciclopedia italiana, 2001, pp.26-36 参照。

⁶¹ 地理学と世界誌の間の、プトレマイオスの伝統とストラボンの伝統の間に横たわる相違については、M. Milanesi, *Geography and Cosmography in Italy from XV to XVII Century*, in 《*Memorie della Società astronomica italiana*》, 2, 1994, pp. 443-68. また更新された書誌を伴った総括として、A. Dorè, *Geography un Renaissance Science*, in *Encyclopedia of Renaissance Philosophy*, cit. と R. Baldasso, *Cosmography*, *ibidem* を参照せよ。

⁶² この主題については F. Mariani Zini, *Rhetoric in the Renaissance*, *ibidem* を見よ。ヴェネツィアの政治・外交界における修辞学の重要性については F. De Vivo, *Information and Communication in Venice. Rethinking Early Modern politics*, Oxford, Oxford University Press, 2007, pp. 20-25 参照。

かんづく必要なことであること⁶³、そしてまたさまざまな論議を通じて、貴下が自然と風俗、諸侯の資質、諸宮廷の統治のありようとそれらの実力について、あらゆる情報を有するようになること、そしてまた今日存在している諸民族一単に今日名の通っているそれらのみならず、戦争と平和を通じ実際に考察の対象となる一に関するあらゆる情報を有するようになることに貴下は配慮すべきであると、小生には思われるようになりました。もし(小生がそう冀いますように)貴下の認識が上記の事柄の内に示されますならば、まさにこうした様々の点についての真の認識を通じて、閣下は諸国家に関する論議において賢明至極な存在となられることでありましょう。こうした知識はそれに先立つものに付け加えられ、〈質料〉として役立つ一方、[これに対する]修辭は〈形相〉と呼ばれ得ることとなりましょう。

マキアヴェッリとの、なかんづく「長きにわたる経験と世事についての絶え間ない学習を通じ、私が何を知っておりまた何を感得したか、そこにおいて私が表明した」『ディスコルスィ』との対比がここで再び有用となる⁶⁴。かかる省察はこれまた学会により企画された『全集』、とりわけ「そこにおいて諸人士や、諸宮廷、諸国、諸国民及び、それがキリスト教徒であろうと不信心者であろうと、また共和国であろうとその他の政体であろうと諸君主の権力に関する、必要でまた学習可能な万事を、素晴らしい秩序を以て含む国家理性に関する五書」との題を持つ序巻に続く著述内の、政治に捧げた刊行物において、それらを見出すことができる。これに対し更に、キリスト教世界のあらゆる君主の収入に関する諸巻や、また彼らに服属する聖俗の諸侯の収入に関する一卷が、また共和国や君主国の間に存在する〈上座権〉(precedenza)を掘り下げて考察する一卷やある君主が別の君主に対して主張する〈要求〉(pretensioni)即ち諸特権を熟考する一卷が続き、遂には

⁶³ 『全集』*Somma delle opere* 中の地理学に関する一覧は、刷新されたプトレマイオスとストラボンをその主役と見なしている。政治家の用に万全に備えるべく、特別な注意が都市や地域、山や川の名前の転写や翻訳そして更新に払われていた。

⁶⁴ N. machiavelli, *Discorsi sopra la prima decade di Tito Livio*, a c, di C. Vivanti, Torino, Einaudi-Gallimard, p.195.

1519年以降キリスト教世界諸君主間に締結されたあらゆる項目が続く巻が想定される。着目に値するのは、〈国家理性〉という表現がここにおいて断罪を含意しない、つまりはグイッチャルディーニやデッラ・カーザと比べて、新しい態度を伴った国際的展望を見出しているということに他ならない(グイッチャルディーニは〈国家理性〉という句を道徳規範からの逸脱ととらえており、またデッラ・カーザもそれを同様の理由に基づいて否定的に捉えている)⁶⁵。

修辞に関して言えば政治に対する関心、換言すれば活動生活に対する関心は、『全集』中のそれに対して捧げられた部分において確認され得る⁶⁶。

それを執筆した理由に関する手短な説明を伴った、国家を主題とする諸書簡からなる一巻……戦争と交渉と和戦の決着についての、当代ドイツやハンガリーや低地諸国、はたまたカール5世やフェルディナンド1世といった皇帝たちの諸宮廷において生じた主要な出来事が、諸々の都市や地域そして城郭についての若干の特別な記述と共にそこに包摂される、百通の書簡の集成。

読書と討論と実践を媒介とした当代世界の〈情報の全体〉は、企画された刊行物の一覧からも推測されるように、バデルと彼の学会がオリチェッラーリの園における集会の模倣において、あるいはフィレンツェのそのの如き国立の学会の創設を通じて、ヴェネツィアの指導層の育成のために推進しようとした当の目標であった。

とりわけ強調に値するのが、そこにおいてバデルが名にし負うフィレンツェの秘書官[マキアヴェッリ]を彷彿とさせる人物を通じて、ギリシア語が読めたり話したりできると称した詐欺師をからかった一文に他ならない。

小生は我が君がこの私の書き物を、他の誰にも読ませるために委ねたりは

⁶⁵ この主題と関連する書誌については S. Testa, *Reason of State. Renaissance Concept of*, in *Encyclopedia of Renaissance Philosophy*, cit. 参照。

⁶⁶ Guarna, *L'Accademia veneziana*, cir. pp. 71-82, 93, 97 更には pp. 257-59 の見解とも合わせて考察すべし。

しないと考えておりますので……心安立てに申し上げます。私はギリシア語につき、ラテン語か俗語に置き換えられたものかは別にして、それらの著者の翻訳をずっと読み続けているにもかかわらず、著者に即してその研究を行っていると号し、その稀有なる学識によって、高く評価される人たちのことを存じております。このような人物はこうした著者たちの書物を得意満面に机の上にこれみよがしに広げているものの、その翻訳を閉じられた書庫の内に隠し持っているのです。このような嘘偽りを使って名声を博することにより彼らは、多くの若者の時間を空費させ、多くの素晴らしい知性の光を台無しに⁶⁷してしまいました。彼らはもし鍛え上げられたなら、彼ら自身の名を高め、祖国や父祖や友人たちを喜ばしめることにより、自身に多大な勲をもたらすこともできたことでありましょう。

観想生活に対する活動生活の優位という、インフィアマーティ学会の内懐における論争に立ち戻れば、ベルナルディーノ・ダニエッロ⁶⁸(彼もまたこの学会のメンバーの幾人かとの関係を有する人物である)が、若きバデールに対し、彼の家門と彼自身がヴェネツィアの政治において果たした役割を踏まえ、活動生活をしっかり維持することの重要性を描き出している。ダニエッロの言葉と比較した場合、外交官[バデール]が理論的学問の研究の回避を推奨するときの、皮肉であると同時にうんざりしたような諧調は印象的ですからある。

こうした諧調の証は、観想生活を賞賛すべく当時一般的に用いられたペトラル

⁶⁷ “台無しにする” amozzare とは即ち *Grande dizionario della lingua italiana*, a c. di S. Battagli, 21 vol., Torino, UTET, 1961-2002, I, 1966, p.420 によれば, “枯渇させる” inaridire の意である。「Ammozzare (ammozzo に由来) とは即ち特定の土壌において潤いが失わせたり, 硬化を起こさせたりすること (過度な乾燥により)」。

⁶⁸ D. Daniello, *Al Magnifico M. Federico Badoer*, in *Novo libro di lettere scritte da i piu rari autori et professori della lingua volgare italiana*, Venezia, per Paulo Gerardo, 1544, cc. 15v- 20r (18), 及び M. T. Girardi, *La lezione su “verdi panni, sanguigni, oscuri o persi” (RVF XXIX) di Benedetto Varchi academico infiammato*, in 《Aevum》, LXXIX, 2005, fasc. 3, pp. 677-718 とりわけ pp. 689-90 参照。

カの名高い一句を彷彿せしめる表現の利用に看取できる⁶⁹。

ごく僅かの中に閣下が種々の言語や道徳哲学、歴史、世界誌更には国政や弁論術についての習得者になることができるなどと、誘い水をかける多くの者が現れることでありましょう。だがこの間に閣下に真に必要なのは、私たちの精神を地から天へと引き上げてくれる、自然哲学や神学や科学の認識に身を入れることなのであります⁷⁰。親愛なる我が君よ。こうした輩はとんでもない嘘つき野郎です。こんな偽りの見解に騙されるが儘にならないことこそ、閣下にとって肝要なことなのです。そうした多様なそして深遠な事柄に通じるようになる前に、我々のこの地上での生は過ぎ去ってしまうことでしょう。だがしかし私がそれが可能なことだと認めるべきにもせよ、それでもなお最初になされるべきことは、より必要なことに専念することに他なりません⁷¹。

外交官や文人たちをめぐるこうした環境下において、指導階層の公達を教育しようとの志は、近代世界を規律する政治的理論と実践に取り組む経緯において、はっきりとしたものとなっている。このような目的のために、経験の強調がしばしば提唱された。この経験という場において、諸外国に関する報告書やその他の

⁶⁹ G. A. Gesualdo, *Il Petrarca colla sposizione di Giovanni Andrea Gesualdo*, Venezia, per Ioan Nicolini et i fratelli da Sabio, 1533, c. XIIv.

⁷⁰ 「私たちの精神を地から天へと引き上げる」という韻文句への言及は、*Gloriosa columuna in cui s'appoggia in F. Petrarca, Canzoniere. Rerum vulgariarum fragmenta*, 2 voll., a c. di R. Bettarini, Torino, Einaudi, 2005, I. p. 44からの引用である。インフィアマーティ学会の会員の幾人かがそれに関与していた、パドヴァのエレパーティ学会は1557年、このペトラルカの一句をその標語(モットー)に採用した。エレパーティ学会に関しては、C. Roaf, *Introduzione*, in S. Speroni, *Canace e scritti in sua difesa*, a c. di C. Roaf, Bologna Commissione per i testi di lingua, 1982, p. XXXIXを参照。

⁷¹ Rose, *The Accademia Veneziana*, cit., p.192は行文を、「視野の広い政治家にとり勉強は不可欠のものである。彼は世界誌を、外国の習俗を、ラテン語やギリシア語を修学すべきである。それによって彼は修辞学や道徳哲学そして自然哲学、更には我々の心性を地から天へと高める諸学を理解できるようになるのである」と翻訳しているが、そのはらむ皮肉を取りこぼしている点において、内容を誤解しているように思われる。

政治的性格の時局的の著述—訓令や分析，通知や討論といった—が特別の価値を有したのである⁷²。常にヴェネツィアという圏域においてであるが，ジョバン・バティスタ・ラムジオが，古代人に由来する世界に関する知識が，経験に裏打ちされた近代人の地理的発見の光に照らせば，誤ったものに過ぎないことを暴露して，これと同時期に経験の価値を強調している⁷³。

実を言えばあまり明瞭ではない行文において，それらの応用と比較してそれらの研究に専ら没頭し得た年月に関する，懐古的な追懐に纏綿とする際にバデールは，活動生活と観想生活の断層をよく認識していたように見える。

そしてもし私が苦渋を忍ぶことにより活動生活の真の道を通じて心得，またそれを幾分かは実現できたと同様に，このように私の生涯の盛りの時期に文学の甘美なる趣味を手に入れたとして，私が成し得たこととの比較において，私が本当に実行したことはほとんどないように私には観じられる。

慣習的な挨拶の句に先立ち手紙は受取人が，そこで読むべき著作家たちが一覽化されることになるであろう，別の何通かの手紙を受け取ることになるうとの約束によって，締めくくられている。これらの手紙については，*Reginense Latino2027*の集成にもその足跡がない。だがヴェネツィア学会の出版計画が単に，バデールがリッポマノに如何にして教皇の良き奉仕者となるかにつき，教えを垂れるために書き送ろうとしたものに過ぎないと考えることは，なかなか示唆的なことであろう。

⁷² 外国に関する，その法や習俗に関する経験の重要性について私はこれを，*Peregrinaggio di tre giovani figliuoli del re di Serendippo per opera di M. Christoforo Armeno dalla persiana all'italiana lingua trapporato* (Venezia, Michele Tramezzino, 1557) , in S. Testa, *Teoria e pratica nel Tesoro Politico* (1589) , in *Boteriana III. A trent'anni dal volume Giovanni Botero e la Ragion di Stato* (1992) , a cura di Enzo Bordini, a c. di A. raviola- C. Silvagni, Torino, Centro Studi Piemontesi, 2023, pp. 45-63 とりわけp. 51に委ねたい。

⁷³ F. Lejosne, *Ecrire le monde depuis Venise au XVIe siècle: Giovanni Battista Ramusio et les "Navigazioni et viaggi"*, Genève, Droz, 2021 参照。

その他の史料に窺えるバデールの計画

1559年にバデールはヴェネツィア共和国元老院宛請願において、「当代」に関する研究の価値を再論しているが、それは元老院議員たちが彼の学術計画を承認し、指導階級の教育的形成の有用性を認識するように、との意図からであった。

貴族階級が取り分けても享受することとなるいま一つの恩恵は、これである。即ち、ヴェネツィア共和国によってのみならず、キリスト教諸国並びに異教徒諸国の間において強国と目される国において考慮の対象となる、世界の諸国諸地域の知識を手に入れることができるということである。それを通じ、昨今世を統べる各君主諸侯の内政外交にわたるあらゆる判断や、彼らの統治やその宮廷が取るあらゆる形態(即ち、それがどれだけありどのようなものであるか、またこうした統治や宮廷に由来する万事)が知られるようになるであろう。またこれに加えこれらの全てを通じて、こうした君主諸侯の有する疆域の大小を、これら諸国において何が豊富であり何が欠けているかといった、この点に関しより深い認識を与える様々の点とともに知ることができるようになるであろう。或いはそれら各国の各々の住民に関し、知ることが必要と思われるすべての事を、詳細に理解できるようになることであろう。加えて陸海軍のことや資金のこと、更には君主が臣下との間に、あるいは世界の君主間に有する知識や、同盟関係や従属関係をめぐる世界のあらゆる列強の勢力について、どんなものに対しても望まれるべくもないような、明瞭詳細な認識が得られることだろう⁷⁴。

⁷⁴ Rose, *The Accademia Veneziana*, cit., p.232. 〈宝鑑〉(thesoro) という語彙については S. Testa, *Treasures of Knowledge: Thesoro as a Handbook in the Sixteenth century, in Essays in Honour of Jane Everson*, ed. by S. Jossa- G. Pieri, Oxford, Legenda, 2017, pp. 123-34を見よ。〈宝鑑〉(thesoro) なる語はまた、*Catalogo dei Libri che in varie scientie et arti, nella latina lingua et nella volgare ha nuovamente mandato l'Accademia veneziana alla fiera di Francfort*, Nell' academia venetiana, 1559の「あらゆる作品を刊行することによって…学会の〈宝物〉(thesori) の全貌が世に知られるように努める」という文においても、再見される。

『全集』の序論そのものが[人々の]関心を掻き立てることとなった。なぜなら学会創設者バデールの賞賛の合間に、それらの会合が公益に寄与しないことの故になされた、先立つ諸学会に対する批判に加え、この人物の「国家運営における多大な経験」が強調されたからである。

…過去の諸学会には全く根気が欠けていた。それらの学会は研究の取り扱いにおける、それら自身の満足だけをその関心の主要な対象とするものであった。[(これ対し)バデールは]我々の学会を、キリスト教世界の力量ある、必要に応じたそして荣誉溢れる制度の上に据えた。こうした諸制度は多年にわたりこの学会を適切に維持するに十分なものであった。

結論

コラード・ヴィヴァンティは以下のように書き記している。「スペインの優位によりイタリア諸国の行動が深刻に制約されようとしていた時……肝要となったのは情報の関係性であり、我々が主導性と称するところのものではなかった」⁷⁵。マキアヴェッリの外交的關係性は、「現実の客観的な記述」として解読されることとなった。「なぜならかかる関係性は、彼らがそれを目当てとする政治的目的を少しも意味しなかったからである」。その一例はサンソヴィーノが、ヴィンチェンツァ・ルパーノとトンマーゾ・アウススの偽名の下に刊行されたフランスとドイツに関するマキアヴェッリの報告を、如何に活用したかに窺える。バデールにより指導されたアカデミア・デッラ・ファーマ(〈名声〉学会)の諸計画—なかんずく政治的論題に関するそれ—は、残念ながらその当初の意図において中断されてしまい、またそのために批評的となってしまったものの、マキアヴェッリ的な

⁷⁵ Vivanti, *Machiavelli e l'informazione diplomatica*, cit., pp. 45-46.

外交関係性と『政治宝鑑』⁷⁶のような冊子の問題群の間の分岐点と目されている。すでに描き出されたように⁷⁷、この冊子は諸国家とその諸制度の単なる客観的記述を超えたものである。それは実に、教皇選挙、ポーランド王の選出あるいは反トルコ同盟の結成の如き地政学的諸問題につき保存された諸文書資料は無論のこと、国際政治外交の将棋盤上に繰り広げられる諸国の歴史や制度、習俗、法律、経済力、軍事力、諸民族と諸統治者たちの性質に基づく、それぞれの利害関心の更新された分析の公開を踏まえ、時代の潮流の読み解きを提示するものであった。論議的となっている著述家シッピオーネ・カストロの名を付された⁷⁸、「国家とその統治制度の根拠について」と題された巻頭論文は、理論的前置きの役割を果たし、飼いならされたマキアヴェリズムにより特徴づけられている。だがしかしこの論考において我々の印象に残るのは、著者が各国の性格付け(法律・風俗・歴史等々)を通じ、人民のより容易な統治のため統治者が身に着けるべき知識を示唆している点だ。

1589年当時バデールは既に70歳になろうとしており、当時彼が何に従事していたか我々は知ることができない。だがこの考察の光の助けのもと、『政治宝鑑』が着想されまた実現したのが、ヴェネツィア周辺であることは、それを書いた者が主張する処や、出版者コミーノ・ヴェントゥーラに関する近年の研究の示唆する処に従って⁷⁹、ますます確かなこととなっている。

マキアヴェッリが常に眼前に凝視すべしと説いた〈具体的真実〉(verità effettuale)

⁷⁶ *Thesoro politico. Relazioni istruzioni trattati, discorsi varii. D'Ambasciatori Pertinenti alla cognitione, et intelligenza delli stati, interessi, et dipendenze de più gran Principi del Mondo. Nuovamente impresso a beneficidi chi si diletta intendere, et pertinentemente discorrere li negotii di stato. Nell'Accademia Italiana di Colonia L'Anno 1589* [『政治宝鑑－種々の報告・指令・論述・論議。世界の大王の現状や利害そして相互依存関係につき精通した諸大使について。国家の交渉ごとを理解し、またそれを談じることを好む士の期待に応え、新たに刊行されたる』]。

⁷⁷ S. Testa, *Italian Academies and Their Networks, 1527- 1700. From local to Global*, New York-Basingstoke, Palgrave MacMillan, 2015, pp.109-21 参照。

⁷⁸ S. Testa, *Sipione di Castro e il suo trattato politico. Testo critico e traduzione inglese inedita del Seicento*, Manziana, Vecchiarelli, 2012 参照。

⁷⁹ R. Frigeni, *Introduzione*, in G. Savoldelli, *Comino Ventura, annali tipografici dello stampatore a Bergamo dal 1578 al 1616*, Firenze, Olshiki, 2011, pp. LI-LV.

は、ヴェネツィアの指導階級の政治実務的手引書としての『政治宝鑑』の計画において、正に完成されたのであった。

(訳者：金沢大学人間社会研究域国際学系)